

〈論文〉

「ガ/ノ交替」再考：文レベルからの考察

山橋幸子

1. はじめに

名詞句の修飾節である埋め込み文において，“主語”に後接するガとノを交換しても意味が変わらない現象を，一般に「ガ/ノ交替」現象という。^{注1}

(1) a [名詞句 君ガ泣きたい気持ち] b [名詞句 君ノ泣きたい気持ち]

(1) においてaの「君ガ」もbの「君ノ」も「泣きたい」の主体と解釈でき，ガとノは交替可能であると考えられる。しかし，この名詞句が文中に現れた場合には，状況が異なる。

(2) a * [君ガ泣きたい気持ち] に同情する

 b [君ノ泣きたい気持ち] に同情する

(1) の句内で可能なガが(2) の文中においては不可能である。このことは，一般に言われているガ/ノ交替現象には，名詞句内における意味関係以上の，文全体にまで及ぶ深い共通性がないことを示す。

本稿の目的は，ガ/ノ交替は文全体のレベルにおいて考慮されるべきであるという観点に立ち，ガとノ及びそれらを伴う「名詞—ガ」と「名詞—ノ」の間にある相違を明確にすることにある。具体的には，ノは属格であり，連体修飾語を形成し，それが文中の他の要素との関連の上に文が構築されており，主格のガとはノの意味用法の一部が重なり合っているだけにすぎず，両者は本質的に異なるものであることを主張する。又，名詞を伴わない場合のガ/ノ交替に関しても，統一的説明が可能であることを述べる。提案が正しければ，ガ/ノ交替現象は，文法分析に重要な課題を提示していることになる。

2. 問題の所在

ガ/ノ交替現象に関しては，ノの文法範疇，ノを伴う名詞の統語構造上の位置，ガ/ノ

交替の方法と制約など、伝統文法においても変形文法においてもこれまでに様々な議論がなされてきた(松下 1930, Harada 1971, Bedell 1972, 牧野 1980, Nakai 1980, Saito 1983, Miyagawa 1993, Fukui & Nishigauchi 1992, Watanabe 1996, 他)。これらの議論の根底には、名詞句内における動詞との意味関係が同じであれば、ガとノの交替が基本的に可能であるという共通した考えがある。²² 確かに、名詞句内では交替が可能に見えるし、又、文のレベルにおいても表面上交替可能な場合が少なくない。例えば、(1)と同じ名詞句が次の文に現れた場合は、ガもノも容認される。

(3) a [君ガ泣きたい気持ち] は分る b [君ノ泣きたい気持ち] は分る

しかし、前述のように(2)の文においてガは容認されない。ガ→ノ(三上 1953, 三原 1994, 他)なのか、ノ→ガ(松下 1930, 他)なのか判然としないが、いずれにしてもガ/ノ交替を認める立場では、(2)のノは(1)、(3)のノとは異なるという見解に立たない限り説明は難しい。しかし、「君ノ泣きたい気持ち」という全く同じ表現内のノを異なるとするのは、その証拠を見つけるのが困難であるのみならず、文法分析の求めるべき「簡潔性」の原理に反するのではないだろうか。²³ むしろ、(2)の例は、ガを伴う「名詞—ガ」とノを伴う「名詞—ノ」の間には、後続の動詞との意味関係上の共通性以上の文全体にまで及ぶ深い共通性のないことを示しているのではないだろうか。同様の例は、外にも存在する。

(4) a [トマトガうれているの] (に気づいた)

b [トマトノウれているの] (に気づいた)

(4)' a * [トマトガうれているの] を食べた

b [トマトノウれているの] を食べた

(5) a [太郎と花子ガ離婚した理由] (は分らない)

b [太郎と花子ノ離婚した理由] (は分らない)

(5)' a ?? [太郎と花子ガ離婚した理由] は両方とも分らない

b [太郎と花子ノ離婚した理由] は両方とも分らない

(6) a [健ガ来たこと] (は知っている) b [健ノ来たこと] (は知っている)

(6)' a [健ガ来たこと] はない b * [健ノ来たこと] はない

(4)において「トマト」はガの場合もノの場合も「うれている」の主体と解され、交替が可能に見える。しかし、同じ名詞句を含む(4)'において容認されるのはノのみである。又、(5)の場合も、「太郎と花子」は「離婚した」の主体と解され、交替が可能に見えるが、「両方とも」を含む(5)'では状況が異なる。ノの場合は、その後にポーズを入れて読むと分るように、容認されるが、ガの場合は不自然である。(6)の場合も、名詞句内ある

いは文レベルにおいてガもノも可能であるが、(6)'の文ではノが容認されない。

これらの現象を踏まえ、以下、ノとガ及び「名詞—ノ」と「名詞—ガ」の相違を明確にし、それが如何に文中の他の要素と関わっているかを考察し、ガ/ノ交替の本質を探る。

3. ノの分析

分析にあたり明確にしようとしていることは、ガとの対比におけるノ自身の文法範疇とそれを伴う「名詞—ノ」の統語的機能及び意味用法である。最初に、最近最も一般的に受け入れられている変形生成文法内における「名詞—ノ」の分析について、本稿の目的の範囲内において概観し、提案に移る。

3.1. 「名詞—ノ」は節を構成するか

最近の極小モデル (Minimalist Program) における研究では、ノを主格とはせず属格とするのが Bedell (1972) 以来の定説となっているが、しかし、それを伴う「名詞—ノ」は統語構造的には節内に顕在するとみる立場が一般的であり、ノの素性を移動という手段を通して如何に照合するかということに議論が集中している。^{注4} ここでは、「名詞—ノ」を「名詞—ガ」と同様に統語構造的に節内にあるとする、本稿の立場と対立する考えに焦点を当て、その問題点を指摘する。(但し、論文では、VP, IP, CP, DP 等理論上の専門用語が使用されているが、本稿では目的に合わせ「節」、「名詞句」等を用いる。)

Miyagawa (1993)、長谷川(1995)にも明示されているように「名詞—ノ」を節内にあるとする根拠は、語順にある。下記の例文(7)において「昨日」は「買った」の修飾語であるが、それが「花子ノ」に先行していることが、「花子ノ」が統語構造上節内にとどまっていることを示しているというものである。

(7) [(昨日) 花子ガ/ノ買った] 本 (長谷川 1995 より)

主格のガを伴う「名詞—ガ」の場合、後続の動詞と主語・述語という文法関係を持つので、下記のように動詞と節を構成し、同じ節内に起こると考えられる。

(8) [名詞句 [節 [名詞—ガ] [動詞]] [名詞]]

しかし、「名詞—ノ」にも同じことが言えるのだろうか。確かに、「名詞—ノ」が統語構造上、動詞句内などの節内の適当な位置にある限りにおいて、「名詞—ガ」同様、意味役割が動詞によって理論上付与されると見ることができるという利点はある。^{注5} しかし、付加詞とされる修飾要素の「昨日」が「名詞—ノ」に先行することが、必ずしも「名詞—ノ」の位置を決定的に示しているのだろうか。下記の例文(9)では埋め込み文の述語「結婚す

る」の修飾語「来年こそ」が主節の主語「私は」に先行しているし、(10)においては埋め込み文の述語「一番説得的だ」の主語である「この意見が」が主節の主語「僕は」に先行している。

(9) 来年こそ私は [息子が結婚する] ことを望む

(10) この意見が僕は [一番説得的だ] と思う

更に、深刻なのは、極小モデルにおける文中の名詞は格を伴う為、「名詞一ノ」が「名詞一ガ」と同様に統語上節内にあるとすると、同じ動詞の同じ意味役割を持つ名詞句が、同じ節内に「名詞一ガ」と「名詞一ノ」という異なる格形態を伴って二つあることになる。これは、項と意味役割の間に一対一の関係を条件づける θ 基準に抵触するという理論上の問題を引き起こすのみならず、経験上も深刻な問題である。実際、下記の例において、「健ガ」と「健ノ」の両者を、同時に、「買った」の主体と解することはできない。

(11) a *健ノ健ガ買った本^{#6} b *健ガ健ノ買った本

又、「名詞一ノ」を節内にあるとする限り、たとえ論理形式部門(LF)で移動という手段に委ね名詞に後接する属格のノの素性を理論上照合することができても、「名詞一ガ」とは異なる「名詞一ノ」の持つ機能は統語構造的には明示されないという問題も残される。

3.2. 提 案

3.2.1. 「名詞一ノ」は連体修飾語

提案と根拠

松下大三郎は、下記のような例におけるノの用法を、「月の頃」、「健の本」等に現れる「体言へつき他の体言に対して連体語」となる『普通の用法』と区別し、「体言へついで事柄の主体を表す」『主体的用法』とし、次のように述べる。

(12) 月ノ出る頃

(12)における「出る」は動詞であってある事柄を叙述している。そうして「月ノ」はその事柄の主体を表している。事柄の主体を表すのであるからこれを主語に換えて「月ガ」の如く言っても意義は通ずる。しかし、「月ノ」は主語とは違う。やはり連体語である。主体を主体として表すのではなく主体を以て事柄の所属を表すのである。だから「ガ」を用いずに「ノ」を用いる。「月ノ出る」は「月ガ出る」ではなく、「月」というものに就いてのその「出る」を表すのである。故に主格とは言わずに主体を表す連体格と言ひ、その用法を連体格の主体的用法という。^{#7}

(松下 1930 : 259-260) (下線は、筆者による)

つまり、「名詞一ノ」は動詞の表す概念の主体としての所有者であり、下記に示すように、

文法的には動詞の修飾語として補充関係を保ちながら、後続の名詞を修飾する。

(13) [名詞句] [[名詞—ノ] [動詞]] 名詞]

従って、松下大三郎の立場から (12) をあえて英語で表現するなら、“the time of the moon’s rising” ということになり、「月ノ」は「出る」と修飾語・被修飾語として文法関係を結び、まとめて「頃」を修飾していることになる。換言すると、(12) の「月ノ」は、それ自身で単独に「頃」を修飾する「月の頃」の「月の」とは異なるということである。

本稿は、音声形式が異なるのみならず、主文で決して主語の位置に現れることのないノをガと区別する松下の立場を支持しながらも、当該のノが、「月の頃」の「の」と同様に、いわゆる属格 (= 連体格, 所有格) のノであり、それを伴う「名詞—ノ」は後続の名詞を修飾する連体修飾語であることを提案する。これは、下記の現象における「名詞—ノ」が、動詞と主述関係がないのみならず、修飾語・被修飾語としての文法関係もなく、連体修飾語であることを示しているという見解に基づくものである。

(14) a 君ガ泣きたい気持ちは分る b 君ノ泣きたい気持ちは分る (= 3)

(15) a *君ガその泣きたい気持ちは分る b 君ノその泣きたい気持ちは分る

前述のように (14) は表面上ガ/ノ交替が可能である。しかし動詞との間に連体修飾語の一種である「その」が現れる (15) においては状況が異なる。ガを含む (15) a が非文なのは、「君ガ」と動詞「泣きたい」が主語・述語という文法関係で結ばれている為である。しかし、ノを含む (15) b が容認されるのは、「君ノ」が「その」と同様連体修飾語であり、後続の名詞「気持ち」とは文法関係を持つが、動詞との文法関係はないからである。同様のことが、下記の例にも示されている。

(16) a 健ガ太っているのは親譲りだ b 健ノ太っているのは親譲りだ

(17) a *健ガあの太っているのは親譲りだ b 健ノあの太っているのは親譲りだ

又、ガ/ノ交替は、埋め込み文においても常に可能ではないことは、よく知られている。牧野によると、下記の例が示すように、「名詞—ノ」と動詞の間にある語が多ければ多いほどガをノに替えることが難しくなる。

(18) a 太郎は花子ノおとし書いた論文に目を通した

b ? 太郎は花子ノおとしアメリカで書いた論文に目を通した

c ?? 太郎は花子ノおとしアメリカのイリノイ大学で書いた論文に目を通した

d * 太郎は花子ノおとしアメリカのイリノイ大学で言語学博士号の為に書いた論文に目を通した

(牧野 1980 : 183)

(18) d においてノは許容されないが、しかし同じ状況でもガは許容されることが下記の例から分る。

(19) 太郎は花子ガおとしアメリカのイリノイ大学で言語学博士号の為に書いた論文に目を通した

この事実も又、「名詞一ノ」が動詞と文法関係で結ばれていない連体修飾語であることを示している。(19)が容認されるのは、「名詞一ガ」が動詞と文法関係で結ばれて節を構成している為、意味上のまとまりも明確であり、動詞から多少離れていても問題がないからである。しかし、(18) dが容認されないのは、「名詞一ノ」が動詞と文法関係がない為、離れていると意味関係の認識が難しくなるからであり、又、「名詞一ノ」が後続の名詞の修飾語である為、統語上、後続のどの名詞も被修飾語となる可能性があり、実際、意味解釈上混乱を生ずるからである。

従って、提案の立場から、(12)を松下の立場との対比において英語で表現すれば、“the moon’s time of rising”ということになる。このように「名詞一ノ」を、動詞との意味関係にもかかわらず、統語上はあくまでも名詞の修飾語であると考えることにより、日本語のノの本質をより統一的にとらえることができ、又、下に記すように、当該の現象を包括的に説明することができる。但し、ガ/ノ交替現象の関わる構造では、動詞が後続の名詞を修飾し名詞句を構成している。従って、「名詞一ノ」の統語的構造は、下記の通りである。

(20) [名詞句 [名詞一ノ] [名詞句 [動詞] [名詞]]]

上記の構造は、(8)に前述した「名詞一ガ」の構造と本質的に異なる。

(21) [名詞句 [節 [名詞一ガ] [動詞]] [名詞]] (= 8)

又、三原(1994)にあるように、「名詞一ノ」を連体修飾語とした際に、もう一つの分析の可能性として考えられる下記の(22)に見られるような構造とも異なる。(22)では動詞の意味役割を担う項の存在を想定する空所(gap)があり、節の埋め込みがある。

(22) [名詞句 [名詞一ノ] [名詞句 [節・Ø [動詞]] [名詞]]] (Øは空所を示す)

表面上ガ/ノ交替が可能に見えるのは、「名詞一ノ」が「名詞一ガ」と動詞との意味関係を共有するからであるが、このことが動詞の意味役割を持つ項の空所の想定を拒否し、(22)が当該の現象の構造としては妥当ではないことを示しているし、又、経験的にも証明される。例えば、

(23) a 健ガ描いた絵 b 健ノ描いた絵

の例においては(23) aも(23) bも同様に解釈できる。しかし、(23) bの「健ノ」のあとに「健ガ」の顕在する、

(24) [健ノ [[健ガ描いた] 絵]]

は(22)と同じ構造を有するが、上記の(23) bとは意味が異なる。(23) bは、(23) a同様、

「健」が描き手であることのみを表すが、(24)は「健」が描き手であること以外に、「健」が「絵」の持ち主あるいは対象であることをも意味する。同様に、

- (25) a 健ノ生まれた家 b 健ノ健が生まれた家

において、(25) aの意味は、(22)の構造を持つ(25) bの意味とは異なる。(25) aは「健が生まれた家」と同じ意味、即ち「家」が「健の生まれた場所」であることのみを表すが、(25) bの場合、「家」が「健の生まれた場所」であることを表すのみならず、「健」がその「家」の所有者あるいは居住者であることをも意味している。

連体修飾語「名詞—ノ」の他の要素との関わり

ノが属格であり「名詞—ノ」が連体修飾語であり、動詞と文法関係を有し節を構成する「名詞—ガ」とは異なることを上に提案したが、次に、このことが文全体のレベルにおいて他の要素とどのように関わりあい、文の構築を左右しているのかを、前述のガ/ノ交替不可能の例を用いて考察する。第一に、

- (26) a 君ガ泣きたい気持ちは分る
b 君ノ泣きたい気持ちは分る (= 3)

- (26)' a *君ガ泣きたい気持ちに同情する
b 君ノ泣きたい気持ちに同情する (= 2)

において、(26)ではガもノも可能なのに、(26)'ではノのみが可能なのは、主節の動詞の持つ語彙的意味情報の要求をノの機能が満たすからである。²⁸ (26)の主節の動詞「分る」は、その対象に形式上「名詞—ノ」を要求しないが、(26)'の「同情する」は、誰か(人)に対して抱く感情を表す為、対象に「人」という意味を持つ名詞か、あるいは名詞が「(ある人)ノ」という形式を伴って修飾されていることを要求する。「*不運に同情する」は不自然であるのに、「彼の不運に同情する」は良いことから分る。「君—ガ」は「泣きたい」と共に節を構成し、「同情する」の要求する形式を満たすことはできないが、属格を伴う連体修飾語である「君ノ」は、「泣きたい」に修飾された「気持ち」と結びつき、「同情する」の要求する形式を満たす。

又、動詞以外の文中の他の要素と関わる場合もある。例えば、

- (27) a 太郎と花子ガ離婚した理由は分らない (= 5 a)
b 太郎と花子ノ離婚した理由は分らない (= 5 b)
(27)' a ?? 太郎と花子ガ離婚した理由は両方とも分らない (= 5' a)
b 太郎と花子ノ離婚した理由は両方とも分らない (= 5' b)

の場合、(27)の文、(27)'の文ともに主節の述語に関しては同じであるが、ガ/ノ交替の

不可能な (27)'は「両方とも」という副詞を含む点で異なる。「両方とも」は、意味上「何が二つある」ことを前提とし、上記の例においては、別々の二つの「理由」がある場合にのみ、生起できる。主格ガを伴う a の文において、「太郎と花子ガ離婚した理由」は、「太郎と花子（という一組の夫婦）ガ離婚した」という事態に対するある「理由」を表す。しかし、属格ノを伴う b の文の場合は、異なる。Miyagawa (1993) の指摘にもあるように、「太郎と花子」のようないわゆる数量表現が関わる場合一般に言えることであるが、「太郎と花子ガ」の場合と同様に解釈できる一方で、「太郎と花子ノ」が「離婚した理由」と結びつき「太郎ノ（花子以外の誰かと）離婚した理由」と「花子ノ（太郎以外の誰かと）離婚した理由」という別々の事態に対する別々の「理由」が存在する解釈も可能である。従って、(27)' a は不自然であるが、(27)' b は容認される。

更に、下記の例のように慣用的な表現の関わる場合も、「名詞—ガ」と「名詞—ノ」の違いが文のレベルで明確になる。

(28) a 健ガ来たことは知っている b 健ノ来たことは知っている (= 6)

(28)' a 健ガ来たことはない b *健ノ来たことはない (= 6' b)

において、「健ガ来たこと」及び「健ノ来たこと」という句内、又 (28) の文においては、ガもノも容認される。しかし、同じ句が主題として主節においても同じ機能で顕在しているにもかかわらず、(28)'においてはガのみが容認されノは容認されない。動詞の過去形に後続する「こと」が、「ある」や「ない」と共起する場合、経験を表すが、この場合、「*健のことはない」や「*そのことはない」が不自然であることから分るように、「こと」が節で修飾される必要があるからである。「名詞—ガ」は動詞と節を構成するが、「名詞—ノ」の場合は節を構成しない。以上、ノ及び「名詞—ノ」の統語的機能を、ガ及び「名詞—ガ」の機能と対比させ、それが文中の他の要素と如何に関わりあっているかを考察した。

3.2.2. ノの意味用法の多様性

このセクションでは、ノの意味用法上の特性と文レベルにおける他の要素との関わりを考察し、ガ/ノ交替現象の本質を明確にする。

一般に言われているように、表面上ガ/ノ交替が可能に見えるのは、「名詞—ノ」と「名詞—ガ」が動詞との意味関係を共有するからであるが、これは、実質的な意味を持たない機能形態素である属格ノの意味用法が、多様であり、文脈により異なることと関連する。例えば、「漱石の本」において、「漱石の」の意味解釈は多様であり、「本」の持ち主、対象、書き手というように文脈により異なる。当該の現象のように動詞を伴う場合は、その動詞によって意味が制約される。例えば、「書く」を伴う「漱石ノ書いた本」の場合、「漱石ノ」

は「書いた」の主体、つまり「本」の書き手と解される。「本」の持ち主や対象とは解されない。従って、句内においては、松下にあるように、ノをガと変えても意味が通じ、ノ/ガ交替が可能となる。又、動詞によっては、

(29) a 切符ノお持ちでない方 b 切符ヲお持ちでない方

(30) a 帽子ノ忘れた人 b 帽子ヲ忘れた人

のように、「名詞—ノ」は対象にも解され、ノをヲと交替しても意味上変化はない。しかし、このことが、ノが主格あるいは対象格を表すという統語上の機能を持っていることを意味しない。実際、ごく単純な句内においてすら、下記の例が示すように、主体を表していてもノとガの交替が不可能であったり、対象を表していてもノとヲの交替が不自然だったりすることがある。

(31) a 日本人ノ政治に対する態度 b *日本人ガ政治に対する態度

(32) a 芋ノ煮たの(がある) b ?? 芋ヲ煮たの(がある)

又、ノの意味解釈は、上に述べた動詞の項の持つ意味役割的な用法だけにとどまらない。述語的な意味にも解される。例えば、「医者の太郎」の場合、「医者」と「太郎」が同格であることを表し、「である」と解され、又、「(車を)運転の時」は「する」と解される。同様に、

(33) 靴下ノ穴のあいたやつを履いていた

の場合も、「靴下である穴のあいたやつ」と同格に解される。又、

(34) 雑誌ノぬれているのに気づいた

のように、「名詞—ノ」の後の動詞にもう一つの「の」が後接し、句全体の意味が曖昧な場合、「雑誌がぬれている」という事態を表しているとも解されるし、「雑誌であるぬれているもの」という具体的なものを表しているとも解される。前者の場合は、「雑誌ノ」のノはガと交替可能であり、主体的用法と関わっている。後者の場合は、「雑誌である」という同格の用法が関わり、全体として具体的事物を表している。前述の(4)で容認されるガが(4)'で容認されず、ノのみが生起するのは、ノの意味用法の多様性が文中の他の要素の要求を満たすからである。

(35) a トマトガうれているのに気づいた (= 4 a)

b トマトノウれているのに気づいた (= 4 b)

(35)' a *トマトガうれているのを食べた (= 4' a)

b トマトノウれているのを食べた (= 4' b)

(35)において主節の動詞「気づく」は、その対象に、事態も具体的な事物もとるのでガもノも可能である。しかし、(35)'の「食べた」は対象に具体的な物という制限を課す。

従って、「トマトであるうれているもの」というように具体的な事物を表す「名詞—ノ」の関わるbの文は容認されるが、この意味用法を持たないガを含むaの文は容認されない。

以上、ノの意味用法は固定してはず、主体、対象、同格など多岐にわたることを見た。一般に言われるガ/ノ交替現象は、従って、ノの多様な意味用法の一部がガの用法と重なっているにすぎないだけの現象であると言える。

3.2.3. 名詞に転ずる動詞

Hiraiwa (1998)にもあるように、いわゆるガ/ノ交替現象は、動詞に後続する(主)名詞が必ずしも関わっているとは限らない。

- (36) a [医者ガ来るまで] 待つ b [医者ノ来るまで] 待つ
 (37) a この病院は [看護婦ガいるだけ] ましな方だ
 b この病院は [看護婦ノいるだけ] ましな方だ (Hiraiwa 1998 より)
 (38) a [太郎ガ来ると来ないと] では大違いだ
 b [太郎ノ来ると来ないと] では大違いだ (同上)

上記の(36)において「医者」は「来る」の主体と解され、ガ/ノ交替をしても意味は変わらない。しかし、「来る」に後接しているのは助辞「まで」であり、「月ノ出る頃」に見られる「頃」のような名詞は顕在しない。同様のことが(37)の「いるだけ」、(38)の「来ると来ないと」の場合にも言える。しかし、これは、ノが属格であり、「名詞—ノ」が連体修飾語であるという前述の提案、及び(20)に示した構造の基本的な考えと異なるものではない。

- (39) [名詞句 [名詞—ノ] [名詞句 [動詞] [名詞]]] (= 20)

それ自身独立せず、常に他の語に付属する助辞の中には、それが付く語の品詞を他の品詞の機能を持つものに転ずる準用という機能を持つものがあるが、上記の例に見られる助辞は動詞を名詞化する準用辞と見ることができる。^{注9} 橋本進吉が準体助詞とよんだ前述の(34)、(35)、(35)'に見られる動詞に後接する「の」の場合も同様であるが、(36)の「まで」、(37)の「だけ」などの副助辞は先行の動詞を名詞の持つ機能に転ずる。実際、

- (40) 雑誌ノぬれたのがある

の「ぬれたの」が、名詞に後接する主格の「が」を伴っているように、「まで」や「だけ」を伴う動詞にも同様のことが起こる。

- (41) 医者ノ来るまでが問題だ
 (42) 彼は、学校を休まないだけがとりえだ

又、(38)の「来ると来ないと(では)」の場合は、並立助辞が「来ると」と「来ないと」

の「両項を合わせた全体が体言の機能を帯び、体言に準用する」（森岡 1994：274）ともとれるし、又、「来る（の）と来ない（の）と（では）」のように名詞化の「の」が省略されているともとれる。従って、当該の「名詞—ノ」は、準用辞により名詞化した動詞に対しての連体修飾語であり、構造は概略下記のようなになる。

(43) [名詞句 [名詞—ノ] [名詞 [動詞—準用辞]]]

4. さいごに

本稿は、ノが属格であり、これを伴う「名詞—ノ」が統語的には連体修飾語であり、ガ及び「名詞—ガ」とは、統語的にも意味用法的にも異なるものであることを主張した。そして、このことが文の構築を左右していることを示し、一般に言われているガ/ノ交替現象は、単にノの意味用法の一部がガの用法と重なっているにすぎない現象であることを示した。又、名詞を含まない場合のガ/ノ交替に関しても、準用のケースとして統一的に説明できることも述べた。提案は、“one form, one meaning”の原理 (Dwight Bolinger (1977) 他) にも適うものであり、また、日本語のノの機能を包括的に説明することを可能にし、日本語文法の簡略化にも繋がる。しかし、これが正しければ、ガ/ノ交替現象は文法分析に一つの課題を呈していることになる。「名詞—ノ」は「名詞—ガ」と同様、意味上は動詞とまとまってある事態を表すが、動詞と文法関係は持たず、あくまでも連体修飾語として機能している。つまり、「月ガ出る頃」の「出る」が「月ガ」と共に事態を表し、文/節を構成しているように、文/節が動詞を中心とした項のまとまりで構築されているならば、少なくともガ/ノ交替現象の関わる埋め込み文は異なる。「月ノ出る頃」の「出る」は「月ガ出る頃」の「出る」と同じ動詞であるにもかかわらず、「月ノ」と文/節を構成せず、意味関係と文法関係がそれぞれ独立している。

注1 本稿で用いる「名詞」は、一般に言われるように、「が」、「を」などを伴い主語や目的語になる語を指し、「体言」と交換しても本稿の目的に影響はない。

注2 但し、Miyagawa 1989 に下記のような例に基づく Argument (項) vs Adjunct (付加詞) の理論上の相違という観点からの分析がある。

① 子供ガ/ノ笑った時を思い出した

② 子供ガ/*ノ笑った時、となりの部屋にいた

上記の例文において①の「時」は項であり意味役割を持つが、②の「時」は付加詞であり意味役割を持たない為、属格を伴う“主語”「子供ノ」の移動ができないことが非文の理由というものである。しかし、この対比が必ずしも決定的でないことが下記の例によって分る。

③ 母ガ/ノ死んだ時, 私はまだ10歳だった

③において「時」は、付加詞であるが、ノは容認される。

注3 Chomsky (1993 他)による極小モデル (Minimalist Program) 他参照。

注4 Miyagawa 1993, Watanabe 1996, Hiraiwa 1998 他参照。

注5 変形生成文法における θ 理論 (θ -theory) では、「個々の動詞にはそれぞれ辞書でその項構造, 即ちそれが必要とする項とその θ 役割 (意味役割) が指定されており, その動詞が用いられると, その文中の項に該当する要素にそれぞれの θ 役割が動詞から付与される」(外池 1998 : 121)。

注6 但し, 最初の「健」を「本」の所有者として解する場合は許容される。

注7 原文で使われている「が」, 「の」は, 「ガ」, 「ノ」に, 「=」, 「**」の記号は例文に基づき具体的な語彙「出る」, 「月ノ」に置き換えた。

注8 伝統的にも受け入れられているように, 文中で共起する項の数や種類は動詞によって決まっている。

注9 森岡 1994 : 273-274 参照。

参考文献

- 草川昇 (1987) 「終助詞「の」についての一考察——用法と用例——」『国語学論説資料 24』第3分冊文法 pp. 332-343
- 田中章夫 (1977) 「助詞 (3)」『岩波講座日本語 7 文法 II』岩波書店 pp. 359-454
- 田淵行則・稲田俊明・中島平三・外池滋生・福井直樹 (1998) 『岩波講座言語の科学 6 生成文法』岩波書店
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 外池滋生 (1990) 「「の」の論理形式——「は, が, も」の論理形式に続いて——」『明治学院論叢』447号 明治学院大学 pp. 66-99
- 外池滋生 (1998) 「第2次認知革命」『岩波講座言語の科学 6 生成文法』岩波書店 pp. 98-159
- 長谷川信子 (1995) 「「の」のシンタクス——ミニマリスト・プログラムの立場から」『言語』Vol. 24 No. 11 大修館 pp. 62-69
- 橋本進吉 (1948) 『国語法研究』(「橋本進吉博士著作集」第2冊) 岩波書店
- 牧野誠一 (1980) 『繰り返しの文法——日英語比較対照』大修館書店
- 益岡隆志・仁田義雄・郡司隆男・金水敏 (1997) 『岩波講座言語の科学 5 文法』岩波書店
- 松下大三郎 (1930) 『標準日本口語法』中文館書店 (復刊 (増補校訂) 勉誠社 1977)
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院 (復刊 くろしお出版 1972)
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』松柏社
- 森岡健二 (1994) 『日本文法体系論』明治書院
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman Group Ltd. (中右実訳『意味と形』1981 こびあん書房)
- Bedell, George (1972) On no. In *Studies in East Asian Syntax*. In *UCLA Papers in Syntax No. 3*, UCLA, pp. 1-20
- Chomsky, Noam (1993) A Minimalist Program for Linguistic Theory. In Hale, K. & Keyser, S. J.

- (eds.), *The View from Building 20*, MIT Press, pp. 1-52
- (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press
- Fukui, Naoki & Taisuke Nishigauchi (1992) Head-Movement and Case Marking in Japanese. In *Journal of Japanese Linguistics*, vol. 14, pp. 1-35
- Harada, Shin-ichi (1971) Ga-No Conversion and Idiolectal Variations in Japanese. 『言語研究 60』 pp. 25-38
- Hiraiwa, Ken (1998) Nominative-Genitive Conversion, Feature Checking, and the Syntax of Verbal Inflection in Japanese. 『日本語学会 第117大会予稿集』 pp. 61-66
- Miyagawa, Shigeru (1989) Structure and Case Marking in Japanese, *Syntax and Semantics* 22, Academic Press
- (1993) LF Case-Checking and Minimal Link Condition. In *Papers on Case and Agreement II, MIT Working Papers in Linguistics* 19, MIT pp. 213-254
- Nakai, Satoru (1980) A Reconsideration of GA-NO Conversion In JAPANESE. In *Papers in Linguistics : International Journal of Human Communication* 13, pp. 279-320
- Saito, Mamoru (1983) Case-marking in Japanese. A Preliminary Study. ms. MIT
- Watanabe, Akira (1996) Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese : A CrossLinguistic Perspective. In *Journal of east Asian Linguistics* 5, pp. 373-410